

国立国語研究所学術情報リポジトリ

京阪方言における親愛表現構造の枠組み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2019-03-25 キーワード: 京都方言, 動態調査, ハル敬語, 丁寧語, 親愛表現 作成者: 岸江, 信介, KISHIE, Shinsuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001987

京阪方言における親愛表現構造の枠組み

岸江 信介
(徳島大学)

キーワード

京都方言, 動態調査, ハル敬語, 丁寧語, 親愛表現

要 旨

主として関西中央部で用いられるハルは、京都と大阪においてその使用頻度などに差があることが過去の調査で明らかとなっていたが、なぜ差があるかについてこれまで十分に説明できなかった。関西中央部のハルは一般的に尊敬語としてみなされているものの、京都では大阪で用いられることがないハルの用法が観察されており、これが両都市での差を生み出す一因ではないかと考えられる。先学諸氏による見解では京都のハルには対者敬語（丁寧語）的傾向があると指摘されており、京都市方言の動態調査からこの点を吟味することにした。仮に対者敬語（丁寧語）的であるとすると、聞き手が異なれば、ハルの使用率は変化するはずであるのに、聞き手を替えてもハルの使用率にさほど大きな差が出なかった。ところが素材が異なる場面ではハルの使用率が著しく低下した。これらのことから対者敬語的用法というよりもむしろ親愛語的な用法があるのではないかという結論に至った。京都のハルに親愛語としての働きがあるとすれば、大阪のヤルが対応し、京阪共通の軽卑語のヨルと共に親愛語の体系を形成するということになる。

1. はじめに

京都と大阪で用いられるハル敬語（以下、ハルと呼ぶ）はこれまで形式や使用頻度の上で違いがあることが指摘されてきた。

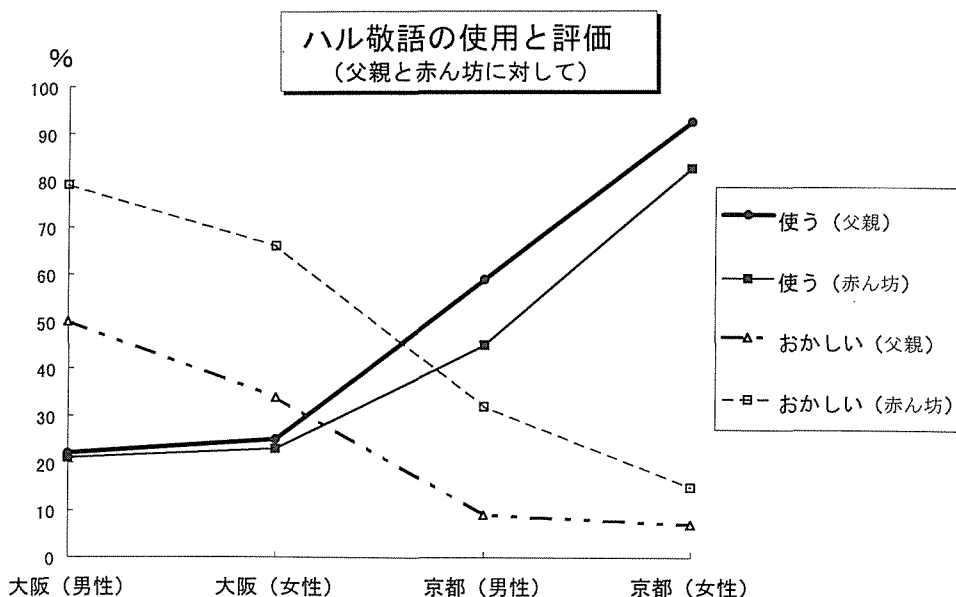
形式の上からはハルが五段動詞に続く場合、京都では動詞の活用部がア段（イカハル）であるのに対し、大阪ではイ段（イキハル）になるといった対立が認められる¹。また、両都市において、ハルの使用頻度自体に差があることを岸江(1993)で指摘したことがある。京都市と大阪市とでは、日常の言語生活において大阪市よりも京都市の方がハルの使用率が高い。両都市でハルの使用に関する調査を行ったところ、敬語は男性よりも女性によく用いられると一般に言われているように、京都と大阪でもそれぞれ男性よりも女性の方がその使用率が高かった。ところが大阪の女性と京都の男性を比較した場合に京都の男性の方が大阪の女性よりもハルの使用率が高いという興味深い事実が明らかとなった。宮治(1996)によると、京都・大阪の高校生を対象とした調査で、父親を第三者、すなわち、話題の人物として待遇する場合のハルの使用は京都で多く、大阪では皆無に近いと報告している²。この報告は恐らく高校生だけではなく、京都・大阪の全世代に当てはまるのではないと思われる。このような理由からハルは京都と大阪でその使われ方が若干異なるのではないかと考えられる。そこで本稿では使用頻度に差があったり、使われ方が異なるとい

う点に注目して、主に1993年～1994年に京都で行ったハルに関する動態調査結果を援用し、この点について言及してみることにしたい。

なお、中井(1992)・岸江(1997)では、ハルは京都・大阪を中心に用いられ、その使用範囲は徐々に近畿中央部から周辺部に拡大しつつあるとしている³。また、ハルの成立に関しては諸説があるが、金沢(1993)では自説を交えてこれらを詳しく紹介している。

2. 京都・大阪におけるハルの使用の比較

関西中央部において、京都と大阪では、共にハルが用いられるにもかかわらず、使用頻度や使



【図1】

われ方に微妙な差が認められる。岸江(1993)では、この差を次のように解釈した。「両都市のハルはレル・ラレルよりはやや待遇価が低い⁴が、大阪の場合、明らかに素材敬語(尊敬語)的であるのに対して、京都のハルには素材敬語的要素のほかに、対者敬語(丁寧語)的、かつ美化語的・親愛語的傾向がある。この根拠は、京都ではハルが目上ばかりではなく、身内の者、目下、赤ちゃん、そして動物等にまで使われることがあるからである。」これらの点をまず再確認するため、岸江(1993)で提示した関西中央部主要4都市(京都・大阪・奈良・神戸)の「ハルの使用」、及び「ハルの使用に対する評価」のグラフの中から、京都・大阪のデータだけを取り出し、グラフを描き直したのが【図1】である。【図1】は、「父親」や「赤ん坊」を第三者として扱う場合にハルを使用するかどうか、また、これらの話題の人物に対してハルを用いるのはおかしいかどうかについて質問した結果⁵をまとめたものである。この結果では京都と大阪とでハルの使用やこれの使用

に対する評価に顕著な差がある。京都の女性では、話題の人物、すなわち第三者である父親や赤ん坊にハルを用いることが多く、かつ、この場合のハルの使用を「おかしくない」とする評価が多いのに対して、大阪の女性では「使わない」の比率が高く、この場合の使用を「おかしい」とする評価の比率が高いという結果が得られた。このような差が一体何によるものか、以下に述べてみたいと思う。

3. 京都におけるハルについて

共通語における敬語は、話題の人物と聞き手との関係を顧慮するという理由から相対敬語的であると一般的に言われている。これに対して、関西では身内敬語が用いられることがあり、今なお絶対敬語の名残を留めているという見方をされることがある(井上1981)。

例えば、野元(1987)⁶によると、関西では妻が家族以外の者と話すとき、自分の夫をハルという形式で待遇するケースがあり、絶対敬語的な名残の一例であるとしている。先に見た京都の結果はこの指摘を支持するものであるといえよう。

ところで、このように京都では話題の人物、すなわち第三者である自分の夫や父親に対してハルが用いられるほか、目下である赤ん坊や、更には動物にまで用いられることがある⁷。

A) 隣のネコ、また、鳴いたハルわ。

B) この赤ちゃん、よう笑わハルなあ。

この赤ん坊や猫に使われるハルを、どう説明すればいいのであろうか。この問いに対する答えとして、先学諸氏に既に次のような記述がある。岸江(1995)でも一部引いたが、ここで再度、引用することにしたい。

島田(1966)『「ハル」は敬語(尊敬語の意味:引用者)から丁寧語へ動きつつあるというべきかもしれない』

加藤(1973)「京都方言の〈オ芋ハンガ煮エテハリマシタ〉の〈オ芋ハン〉は当然のことながら〈煮エテハリマシタ〉も丁寧語と解すべきであろう。」

藤原(1978)「(ハルに言及し:引用者)ていねい意識のもとで尊敬用助動詞を使っている。」

以上、いずれも京都方言におけるハルに関する見解であり、ハルを丁寧語である(あるいはその傾向にある)と解釈しているように見受けられる。となると、京都ではハル本来の尊敬語用法が丁寧語用法へと傾斜していることになる。もちろん京都のハルは身内以外の目上にも当然用いられているわけで、素材敬語(尊敬語)用法もまた盛んである。このようにみえてくると、京都方言のハルは、素材敬語と対者敬語との、いわば両方にまたがっているとみることができよう。先の京都と大阪との差は、まさにこのあたりに起因しているのではないかと思われる。そうすると、赤ん坊や猫の場合のハルも、話題の人物(猫)を待遇するためにではなくて、聞き手への敬意手段として使われたとみることができ、ここでは対者敬語として用いられたとみなすことができるだろう。そこで、もしハルに対者敬語的性格があるとするならば、聞き手への顧慮が働くわけであるから、聞き手が異なることによって(つまり聞き手に応じて)、ハルの使用に差が生じるだろうという予想をたてることができる。

4. 「猫」にハル敬語はおかしいか

この点を確認するため、京都市民に対して、次の①～④のような質問を試みた。

- ① 家族の目下（弟や妹）と話している時、例えば、「隣の猫、何か食べた（て）はるわ」というように「はる」を使うことがあるか。 —【図2】
- ② 隣の奥さん（目上の人）に「お宅の猫、何か食べた（て）はりますわ」というように「はる」を使うことがあるか。 —【図3】
- ③ 家族の目下と話している時、猫に「はる」を使うのはおかしいか。 —【図4】
- ④ 隣の奥さんと話している時、猫に「はる」を使うのはおかしいか。 —【図5】

調査期間は、1993年10月～1994年3月、話者は京都市生え抜きの方、1,002名、調査員は花園大学の国語学概論受講生で、調査は面接を原則とし、各自、自分の家族、知人や友人を被調査者として選んだ。なお、この調査結果の集計は、井上文子氏（国立国語研究所員）によって行われた。1,002名の内訳を以下に示す。

		話者の内訳								
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計
男	性	64	145	54	55	87	29	29	20	483
女	性	58	109	37	130	62	45	53	25	519
										1002

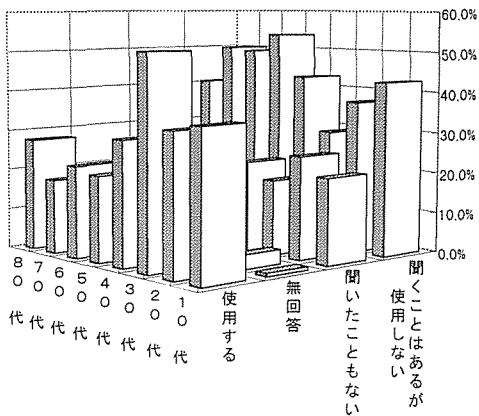
【表1】

男女それぞれ全体的話者の数（男性：483、女性：519）は比較的近いが、世代毎の男女の話者数に偏りがある。また、世代間でも大小があり、例えば、20代・40代の話者数は多いが、80代の話者数は少ない。従ってこの調査では男女各世代毎の話者数が均一的ではない点を断っておきたい。更にこの調査は京都市方言の動態を探るために行われたもので、他の項目との関連で制約があり、ここで扱っているハルの使用と意識に関する項目が少なくならざるを得なかった。これらの点に留意し、以下のデータを参照して頂きたい。それぞれの質問の調査結果については、上記①～④の末尾に示した図の番号に従って提示していくことにする。

まず、【図2】は「家族の目下（弟や妹）」と話す時、猫にハルを用いるかどうかを聞いた結果である。「使用する」と答えた比率は、全体で30.7%であった。一方、【図3】は「隣の奥さん」と話す時、やはり猫にハルを用いるかどうかを聞いた結果である。この場合のハルの使用率は全体で32.5%であった。但し、各グラフの比率を単純に比較するだけでははっきりしたことがいえないので、「家族の目下（弟や妹）」に対する回答（使用する、聞くことはあるが使用しない、聞いたこともない）と「隣の奥さん」に対する回答（使用する、聞くことはあるが使用しない、聞いたこともない）とのクロス集計を行い、両者への回答がどのように関連しているかについてカイ自乗検定を

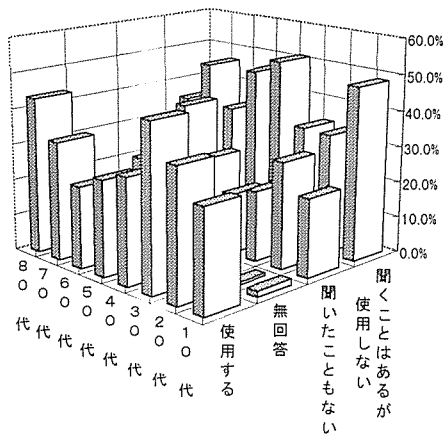
用い調べた。検定結果では、 $\chi^2(4) = 474.682, p < .01$ で統計的に有意であった（換言すると、危険率1%で有意であることを意味している。以下同様である）。

猫にハル敬語を使うか（弟や妹に対して）



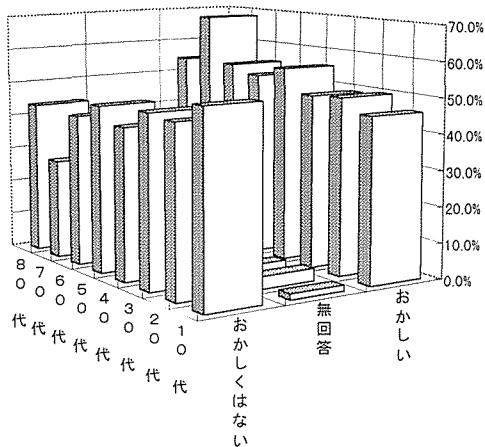
【図2】

猫にハル敬語を使うか（隣の奥さんに対して）



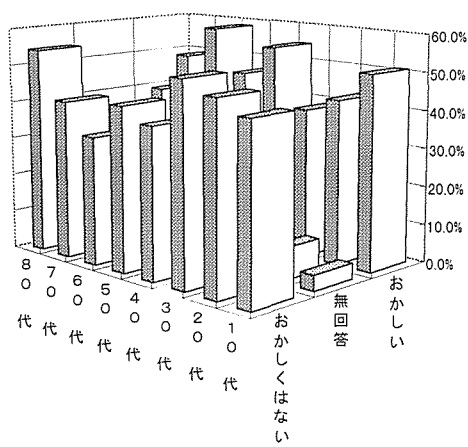
【図3】

猫にハル敬語はおかしいか（弟や妹に対して）



【図4】

猫にハル敬語はおかしいか（隣の奥さんに対して）



【図5】

「家族の目下（弟や妹）」×「隣の奥さん」クロス集計表

家族の目下 (弟や妹) \ 隣の奥さん	使用する	聞くことはあるが 使用しない	聞いたこともない
使用する	68.5%	10.8%	8.5%
聞くことはあるが 使用しない	25.7%	66.8%	30.5%
聞いたこともない	5.9%	22.4%	61.0%

【表2】

【表2】のクロス集計表から分かるように両者への回答には次のような対応があることが判明した。

- (1) 「隣の奥さん」の場合に「使用する」と答えた者のうちで「家族の目下（弟や妹）」にも「使用する」と答えた者は68.5%であった。
- (2) 「隣の奥さん」の場合に「聞くことはあるが使用しない」と答えた者のうちで「家族目下（弟や妹）」にも「聞くことはあるが使用しない」と答えた者は66.8%であった。
- (3) 「隣の奥さん」の場合に「聞いたこともない」と答えた者のうちで「家族の目下（弟や妹）」にも「聞いたこともない」と答えた者は61.0%であった。

また、男女毎、各世代毎（10代～80代）にも検定を行った。いずれの場合も、カイ自乗の検定結果は統計的に有意であった。つまり、【図2】・【図3】をそれぞれ場面だとみなすと、場面に応じたハルの使い分けはこれらの結果からなかったということになる。もしハルに対者敬語的要素が含まれているのならば、当然、聞き手である「家族の目下（弟や妹）」／「隣の奥さん」との間に少しはハルの使用に使い分けが生じてもいいはずであると思われる⁸。

次に【図4】と【図5】では、猫にハルを用いるのがおかしいかどうかの評価について、先程と同じ場面設定で質問した。両図の結果は、共に「おかしい」という評価と「おかしくはない」という評価とに分かれている。【図4】で「おかしくはない」と答えた全体の比率は44.8%、【図5】では44.5%であった。ここでも各グラフのそれぞれの比率を単純に比較するだけにとどまらず、先に行ったのと同様に「家族の目下（弟や妹）」に対しての回答（おかしい、おかしくない）と「隣の奥さん」に対しての回答（おかしい、おかしくない）とのクロス集計を行い、両者への回答がどのように関連しているかについてカイ自乗検定を用いて調べることにした。検定結果は $\chi^2(1) = 346.678, p < .01$ でここでも統計的に有意という結果が得られた。この点、先の【図2】・【図3】と同じく「家族の目下（弟や妹）」に対しての回答と「隣の奥さん」に対しての回答とには対応があったということである。クロス集計表は省略するが、【図4】の場面において「おかしい」と回答した者のうちで【図5】の場面においても「おかしい」と回答した比率（81.5%）と【図4】で「おかしくない」と回答した者のうちで【図5】の場面でも「おかしくない」と回答した比率（80.3%）

がともに高かった。なお、男女毎、各世代毎の検定結果も、全体の検定結果と変わらないものであった。すなわち、この場合も、両場面でのハルの使用に対する評価には差が認められなかったということになる。つまり、「家族の目下（弟や妹）」に対してハルを使うのがおかしいと思っている者は「隣の奥さん」に対してもハルの使用はおかしいと思っている。逆に「家族の目下（弟や妹）」に対してハルを使うのがおかしくないと思っている者は「隣の奥さん」に対してもハルの使用はおかしくないと思っているということである。

このケースでのハル使用の評価に関して、意見が二つに分かれる理由を次のように推測することができないであろうか。本来、ハルは、素材敬語（尊敬語）として使用されるのが規範であり、猫に用いるのはこの規範から逸脱しているわけであるから「おかしい」ということになる。一方、「おかしくはない」とする評価は、ハルには素材敬語（尊敬語）とは別の用法があるということ認める立場であろう。今問題にしているのは、別の用法とは何かということであり、これを明らかにすることによってハルの輪郭を描くことができるのではないかと思う。

ところでこれまで両場面でのハルをはじめから対者敬語とみなして論を進めているが、素材敬語、すなわち、ハル本来の用法である尊敬語の可能性についても考えておく必要がある。つまり、「隣の猫」は「隣の奥さん」が所有するものであるから、「家族の目下（弟や妹）」に対しての場合のハルには「隣の奥さん」に対する顧慮が働いて用いられる、すなわち、所有者敬語の適用範囲の問題と見なすと、場面差が当然出ないからである。この点についてはこれから示すデータともつき合わせて述べる必要があるので後述することにした。

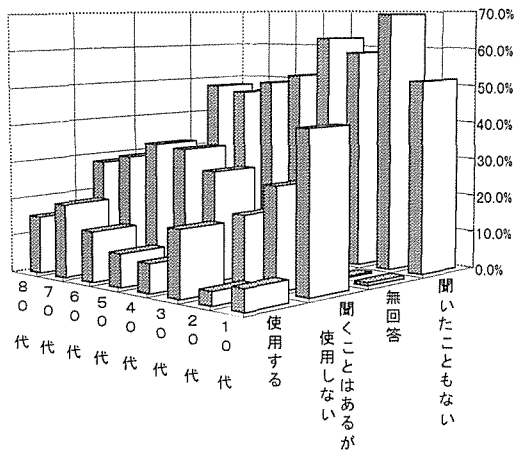
5. 「バス」にもハルは使えるか

猫に行った質問と並行して、バスに対してハルが使われるかどうかを質問した。

- ① バス停で母親とバスを待っていたら遠くにバスが見えた。その時、母親に対して「もうすぐバス来はるわ」というように「はる」を使うことがあるか ー【図6】
- ② バス停で近所の知り合いのおじいさんとバスを待っていたら遠くにバスが見えた。その時、そのおじいさんに「もうすぐ、バス来はるわ」というように「はる」を使うことがあるか。 ー【図7】
- ③ 母親とバス停で話している時、「もうすぐバス来はるわ」というように「はる」を使うのはおかしいか。 ー【図8】
- ④ 近所の知り合いのおじいさんとバス停で話している時、「もうすぐバス来はるわ」というように「はる」を使うのはおかしいか。 ー【図9】

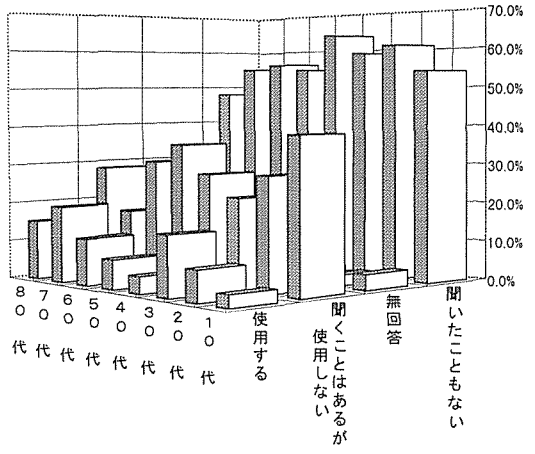
猫にかえて無生物のバスならどうかという質問である。聞き手の方も「母親」と「近所の知り合いのおじいさん」に替えてみた。まず、【図6】・【図7】では先の【図2】・【図3】に比べてハルの使用が極端に低くなっている。「使用する」と回答した全体の平均が【図6】では9.2%、【図7】では8.9%、一方、「聞いたこともない」という回答は【図6】では58.0%、【図7】では57.9%であった。ここでもグラフ上での比率を単に比較するだけでなく、先の二つの検定と同じように、「母親」に対しての回答（使用する、聞くことはあるが使用しない、聞いたこともない）と「隣の奥さ

バスにハル敬語を使うか（母親に対して）



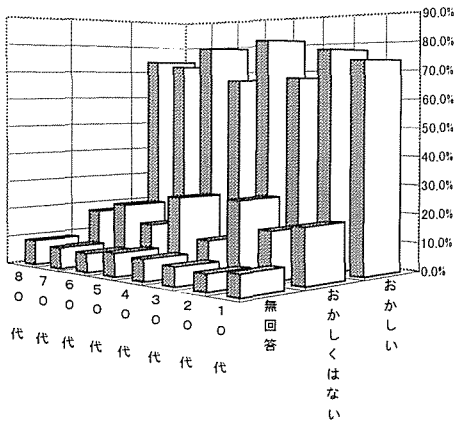
【図6】

バスにハル敬語を使うか（知り合いのおじいさんに対して）



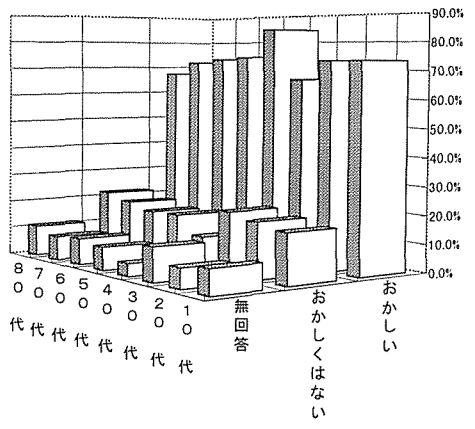
【図7】

バスにハル敬語はおかしいか（母親に対して）



【図8】

バスにハル敬語はおかしいか（知り合いのおじいさんに対して）



【図9】

ん」に対しての回答（使用する、聞くことはあるが使用しない、聞いたこともない）とのクロス集計を行った。両者への回答がどの程度対応しているか、カイ自乗検定で確かめた結果、 $\chi^2(4) = 725.430$, $p < .01$ で統計的に有意であった。「母親」に対してハルを使うのを「聞いたこともない」と回答した者のうち、「知り合いのおじいさん」に対しても「聞いたこともない」と回答した者の比率は89.4%、「母親」に対して「聞くことはあるが使用しない」と答えた者のうち、「知り合いのおじいさん」

「母親」×「知り合いのおじいさん」クロス集計表

母親 \ 知り合いのおじいさん	使用する	聞くことはあるが使用しない	聞いたこともない
使用する	55.7%	6.0%	1.0%
聞くことはあるが使用しない	27.3%	72.1%	9.6%
聞いたこともない	17.0%	21.9%	89.4%

【表3】

に対しても同様に「聞くことはあるが使用しない」と答えた者は72.1%であった。従って【表3】のクロス集計表から分かるように両者への回答には対応があったといえる。同時に男女毎、世代毎の検定を行ったが、各々の結果は全体の検定結果に準じ、いずれの場合も統計的に有意であった。「母親」が聞き手の場合と「近所の知り合いのおじいさん」が聞き手の場合とでハルの使用率にはほとんど差がないといえる。聞き手に応じての使い分けがないという点で、先の【図2】・【図3】の場合とほぼ同じであるといえよう。バスに対する場合も聞き手が違っても場面に応じたハルの使い分けが認められないということになる。もし、仮にハルが対者敬語として働いているとすれば、少なくとも近所の目上である「知り合いのおじいさん」に対して、特に女性の話者ではハルの使用率が男性の使用率よりも高くなるのではないかと思われる⁹。

次にバスにハルを使うことに対しての評価はどうか。この場合も「おかしい」と回答した全体の平均は【図8】で74.5%、【図9】では74.4%でグラフ上でほとんど差がなかった。

ここでも同様に両者への回答に関連があるかどうかをみるため、「母親」に対しての回答（おかしい、おかしくない）と「知り合いのおじいさん」に対しての回答（おかしい、おかしくない）とのクロス集計を行い、両者への回答がどのように関連しているかについてカイ自乗検定を用いて調べた。検定結果は $\chi^2(1) = 407.089$, $p < .01$ で有意であった。クロス集計表の提示は省略するが、「母親」と話す場合にバスにハルを使用するのが「おかしい」と回答した者のうち、94.4% (691名)が「知り合いのおじいさん」と話す場合にもバスにハルを用いるのが「おかしい」と回答した。ここでも両場面での回答には対応があったということになる。

男女毎、世代毎の各検定結果の場合も、例外がなくこの結果に準じた。聞き手が替わってもハルの使い分けがみられなかったということになる。この点について、話者の回答後の付帯説明として聞き手が誰であるかということよりも、バスにハルを使用する事自体おかしいとする意見が多かった。

ところで、猫とバスに対するハルの使用を比較してみると、そこには歴然とした差があることを知ることができる。【図2】・【図3】と【図6】・【図7】のそれぞれのハルの使用を比べると、バスに対してハルが用いられるよりも猫に対して用いられる方がはるかに多い。また同時に【図4】・【図5】と【図8】・【図9】をそれぞれ比較した場合にも、バスに対してハルを用いることが猫に対して用いることよりも「おかしい」とする評価が相当高い。

そこで、【図4】・【図5】・【図8】・【図9】でハルの使用が「おかしい」と回答した話者の割合をt検定(対応のある)を用いてあらゆる組み合わせ(4通り)で確かめた。まず、「家族の目下(弟や妹など)」が聞き手の場合(【図4】)と「母親」が聞き手の場合(【図8】)の検定結果は、 $t(912) = -15.08, p < .001$ で統計的に有意であった。バスにハルの使用は「おかしい」と答えた話者の割合(81.5%)は、猫にハルの使用が「おかしい」と答えた割合(56.1%)より高かった。以下、順次「家族の目下(弟や妹など)」が聞き手の場合(【図4】)と「知り合いのおじいさん」が聞き手の場合(【図9】)、「隣の奥さん」が聞き手の場合(【図3】)と「母親」が聞き手の場合(【図8】)、「隣の奥さん」が聞き手の場合(【図3】)と「知り合いのおじいさん」が聞き手の場合(【図9】)というようにt検定を行った。どの組み合わせにおいても、一様な結果が得られ($-17.1 < t_s < -15.0$)、バスにハルを使うのは「おかしい」とする話者の割合の方が猫にハルを使うのを「おかしい」とする話者の割合よりも有意に高い結果となった。

【図2】・【図3】及び【図4】・【図5】の場合の聞き手は「家族の目下(弟や妹)」と「隣の奥さん」、【図6】・【図7】及び【図8】・【図9】の場合の聞き手は「母親」と「近所の知り合いのおじいさん」というように、猫の場合とバスの場合とで聞き手を替えているので各図を単純に比較するわけにはいかないが、仮に「家族の目下(弟や妹)」と「母親」を「身内の者」とし、「隣の奥さん」と「近所の知り合いのおじいさん」を「身内以外の目上の者」として括ることができるのであれば、猫の場合もバスの場合も、「身内の者」と「身内以外の目上の者」との間にハルの使用に関して、差がでなかったということができるであろう。

以上の理由から、ハルの使用は聞き手に依拠しているというよりもむしろ素材に依拠している公算が大きいという推定が成り立つといえる。無論、この僅少なデータからではハルの対者敬語性を否定することは不可能であり、聞き手への配慮が全くないというつもりはない。むしろ現実的には素材に対する顧慮や聞き手に対する配慮が程度の差こそあれ複雑に絡み合っているというのがハルのみならず待遇表現全般の特質ということに他ならないと思われるからである。従って「素材に依拠している公算が大きい」というのはあくまでもこの限定されたデータの範囲でのみ相対的にいえることであるという点を断っておきたい。

ところで、ここで素材に依拠するというのは、ハルの性格に敬語用法とは異なる親愛語用法があるということである。親愛語とは、その定義として、「素材¹⁰に対して、かわいいと思う気持ち、

親しみをあらわす形式」をいう。猫に対してハルが用いられるのは、この用法に根ざすところが大きいのではないと思われる。親愛語について、少しく触れることにしよう。

大石(1983)所収の「待遇語体系 補説」によると、親愛語を敬語とは別の待遇語としてとらえ、一サン、一チャン、一クンなどを一般親愛語、親が子供に対して「ボク、早くイラッシャイ」、「早く手をアライナサイ」など、聞き手にしか用いられない形式を聞き手親愛語と呼び、親愛語を一般親愛語、聞き手親愛語の二つに分類している。

関西中央部のハルに関する親愛語用法の指摘として、夙に奈良県方言のハルの記述に親しみの用法があるという指摘(西宮1959)があるほか、大石(1983)にも、京都のハルについて、「親愛の意を含んだ軽い尊敬語」であるという見解がある。

6. 「どら猫」にもハル敬語は使えるか

京都市内でのハルの使用(家の中で妹や弟に対して)

質問文	昭3 女性	昭6 女性	昭7 女性	昭13 男性	昭15 女性	昭16 男性	昭17 女性	昭20 女性	昭23 女性	昭25 男性
隣の赤ちゃん、よう笑はるわ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
お猿さん、なんか食べたはるわ	▽	●	●	●	/	●	/	/	●	▽
隣の猫、何か食べたはるわ	▽	/	●	●	/	▽	/	/	●	▽
隣の子猫、何か食べたはるわ	▽	●	●	●	/	●	/	/	●	▽
隣の小犬、何か食べたはるわ	▽	●	●	●	/	●	/	/	●	▽
あのどら猫、何か食べたはるわ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
隣の犬、何か食べたはるわ	/	/	/	▽	/	/	/	/	/	/
あの野良犬、何か食べたはるわ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
チューリップが咲いたはるわ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
蝉がよう鳴いたはるわ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
天井裏でネズミが騒いだはるわ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

《凡 例》

● 使用する ▽ 聞くことはあるが使用しない / 聞いたこともない

【表4】

ハルに親愛語的な用法があるかどうかを確認するため、追認調査という形で京都の生え抜き、10名に素材(赤ちゃん・猫・子猫・どら猫・犬・小犬・野良犬・お猿さん・鼠・蝉・チューリップ)が異なることによって、ハルが使い分けられることがあるかどうかを聞いたところ(1997年8月、京都市左京区と右京区での2日間の調査による)、【表4】のような結果が得られた。子猫・お猿さん・小犬・猫の順によく用いられるが、犬・どら猫・野良犬には用いられないということが明

かとなった。子猫や小犬、お猿さんにハルを使うことがあると答えた5名(10名中)全員が、可愛らしくて、親しみが持てる素材に限ってハルを使うことがあると内省した。一方、残りの5名はハルを動物には使えないと否定したが、赤ちゃんには使えるという点では全員が一致した。10名足らずの話者の調査結果だけでは断言しがたいところもあるが、この結果からもハルを動物に使うことに対して肯定派と否定派がいるらしいことが分かった。話者の数に大きな開きがあるが、【図2】で猫にハルが使えるかどうかという意見が二つに分かれたという点も追認できる形となった。このような点からもし仮にハルに親愛語的な用法があるとしても京都で完全に市民権を得ているとは言い難いのかもしれない。

なお、中井(1997)では、極端なハルの使用例として、三人称、二人称ばかりでなく、一人称(自分自身)にもハルを使うことがあるという。ままごとを一組の男女がしている時、男の子が自分をお父ちゃんと、女の子がお母ちゃんとそれぞれ称し、自分にハルを使うとことがあることを報告している。お父ちゃん、お母ちゃんという素材に対する親愛的な表現として説明できるのでないかと思われる。

7. 大阪のハル・ヤルと京都のハルの対応

ところで、猫にハルが用いられるというようなケースは現在の大阪ではなさそうである。最初のところでみた父親に対してハルを用いる場合なども現在の大阪では極めて稀のようである。この場合のハルは、京都では父親に対する親愛なのか、或は尊敬なのか、俄に論じることはできないが、前者の可能性も大きいのではないかと思われる。大阪ではハルが親愛を表す形式として用いられることはないが、その代わりにヤルが親愛を表す形式として用いられることがある¹¹。

C) 隣の猫、よう鳴きヤルなあ。

D) この赤ちゃん、よう笑いヤルなあ。

等は、日常、よく大阪の女性の間で好んで用いられる。京都ではこの形式が使われない¹²ので、京都のハルに親愛的語用法があるとすると、これ一つで大阪のハルとヤルに対応しているのではないかと考えられる。すなわち、レル・ラレルよりも待遇価がやや低い素材敬語(尊敬語)としての役割と親愛語としての役割である。上に掲げた【表4】と同じ調査を1997年8月に大阪市内(大正区・住吉区・中央区等で2日間実施)でも行った。この調査でも、話者数が少ないので明言することはできないのだが、このような場面ではハルが使用されたり、使用されるのを聞いたことがあるという結果を得ることはできなかった。つまり、【表4】の結果は、京都についてだけいえることであって、大阪ではあり得そうにない結果であるということが出来る。ところが、大阪での調査でこのハルの部分をヤルに変えて質問してみると、ちょうど京都のハルの結果にほぼ対応する結果を得ることができた。【表4】・【表5】を比較参照願いたい。京都ではハルが用いられる素材に対して、大阪では概ねヤルが使われていることが分かる。【表5】では10名のうち、7名が赤ちゃん・お猿さん・猫・子猫・小犬にはヤルを用いることができると回答した。但し、残り3名のうち、2名は男性話者でいずれも聞くことはあるが使用しないと答えた。また、昭和35年生まれの女性は人間には使うことができるが、動物には使えないと内省した。

大阪市内でのヤルの使用（家の中で妹や弟に対して）

回答者 質問文	昭 14 女性	昭 21 女性	昭 25 男性	昭 25 女性	昭 26 女性	昭 31 男性	昭 33 女性	昭 34 女性	昭 35 女性	昭 37 女性
隣の赤ちゃん，よう笑いやるわ	●	●	▽	●	●	▽	●	●	●	●
お猿さん，なんか食べてやるわ	●	●	▽	●	●	▽	●	●	/	●
隣の猫，何か食べてはるわ	●	●	▽	●	●	▽	●	●	/	●
隣の子猫，何か食べてやるわ	●	●	▽	●	●	▽	●	●	/	●
隣の小犬，何か食べてやるわ	●	●	▽	●	●	▽	●	●	/	●
あのどら猫，何か食べてやるわ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
隣の犬，何か食べてやるわ	/	/	/	▽	●	▽	●	▽	/	●
あの野良犬，何か食べてやるわ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
チューリップが咲いてやるわ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
蝉がよう鳴いてやるわ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
天井裏でネズミが騒いでやるわ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

《凡 例》

● 使用する ▽ 聞くことはあるが使用しない / 聞いたこともない

【表5】

あくまでも推測の域を出ないのだが，関西中央部（特に京都）の方言のハルはレル・ラレルなどよりは待遇価がやや低いという意味合いにおいて，一般に敬語が持つ「へだて」の機能もその他の待遇形式（ナハル，オ～ヤス，レル・ラレル，オ～ニナルなど）と比較して弱いのではないかと考えられる。関西中央部において，この形式が好んで用いられるのも，このことと無関係ではあるまい。つまり，「へだて」の弱さ故に手軽で使いやすいということになる。例えば，初対面のころ，レル・ラレルで待遇されていた人がハルで待遇されるようになるというのは，待遇する側がその人にこれまで以上に親近感を持つようになったからに他ならない¹³。すなわち，「へだて」ようとする意識の度合いが減じ，親しさが増したからである。換言するならばハルは敬語の範疇に属しながらもレル・ラレルなどが持つ「へだて」の機能とは異なる「親しみ」の機能を持つ形式であるといえよう。

しかしここで大切なのは，「親しみ」と「親愛」とは意味的には重なり合う部分もあるが厳密には同じではないという点である。「親しみ」と「へだて」は従来，親疎関係として扱われてきた。ハルの場合にはこの関係に加えて「親愛」と「非親愛」という関係も考慮する必要があると思われる。「親愛」には「親しみ」とは別の感情が込められている。すなわち，先に定義したように「か

わいいと思う気持ち」や愛くるしさなどである。従って「へだて」の機能とは異なる「親しみ」の機能とは、ここでは「親愛」の機能といった方が当を得ているものと思われる¹⁴。

京都・大阪のハルは今でこそ助動詞のような姿をしているが、もともとナサル系の補助動詞で、前田(1961)、榎垣(1962)、山本(1962)等で指摘されているように、

イキナサルーイキナハルーイキヤハルーイキャハルーイカハル

という変化過程を辿ったものであろう。前田(1961)によると、大阪ではこれら五つの語形を全部聞くことができた時代もあったということだが、現在では京阪ともにイカハル(大阪市内ではイキハル)が最も優勢となっている。大阪の親愛語であるヤルも、その出自は定かではないが、榎垣(1948)も述べているように、ハルの前身とされるヤハルから変化したものではないかと考えられる。つまり、大阪ではイキヤハルからイカハル(イキハル)という語形とイキヤルという二語形が派生し、一方は尊敬語として、もう一方は親愛語として、その機能を分担してきたのではないかと考えられる。尤も、ハルは、金沢(1993)によると、遅くとも明治末期には大阪で用いられたことが明らかにされている一方、管見の内ではヤルは昭和19年5月の榎垣(1948)の調査で明らかにされたのが最初の記述である。ヤハルから同じ時期に胎生したということはないとされる。

このように語形が変化するだけでなく、その各々の語形が担っている待遇価も語形変化に伴って恐らく徐々に下がっていったのではないかと推測する。大阪の場合、注4に掲げた【図10】からヤハル、ハル、ヤルの順に待遇価が下がっていることが確認できる。

大阪のハル・ヤルと、京都のハルとをその成立及びそれぞれの機能という点から比較した場合に京都のハルに親愛という機能があるとしても、それほど不自然ではないと思われるが如何なものだろうか¹⁵。

ここで、前半に課題として残した所有者敬語と美化語の可能性について考えてみることにしたい。

【図2】の質問文での「猫」は「隣の」となっている点で「家族の目下(弟と妹)」に対する場合も、「隣の奥さん」に対する敬意ないし顧慮が働いたため、親愛語としてではなく、尊敬語としてハルが使用された、すなわち、所有者敬語の適用範囲の問題としてとらえることも可能である。まず、質問文で「隣の」というようにした所はこの点を念頭に置かなかったという点で不備である。京都・大阪での補充調査の結果(【表4】・【表5】)も、この点同様である。ただ、例えば、「お宅の坊ちゃん、もう小学校へ入学なさったんですね」のような場合と、京都のハル、大阪のヤルを全く同列に扱うことはできないように思われるが、京都のハルの場合には軽い尊敬語としての用法があるわけだから、所有者敬語の可能性はあながち否定できないものと思われる。しかし、それではすべて所有者敬語で京都のハルや大阪のヤルの説明がつくかと言えば、かならずしもそうはいかない。というのは、まず、京都のハルの用例のB)や大阪のヤルの用例D)などは自分の娘の「赤ちゃん」に対して用いられることもある。この場合のハルが所有者敬語であるとすれば、自分の娘に敬意を払っているということになり、不自然である。

また、【表4】・【表5】における「猿」の場合は動物園の場合の「猿」に対しても使用が可能である。京都でのハルが動物に用いられる場合、所有の如何に関わるというよりも、その動物が愛

らしいか否かが決め手として働いている蓋然性が高いように思われる（大阪の場合のヤルも同様）。例えば、【表4】の「隣の猫」と「隣の犬」とでは明らかに差がある。この辺りは、「隣の猫」には愛らしさを感じるが「隣の犬」には愛らしさを感じないということで説明できないであろうか。京都生え抜きの数名の話者の方々からこの点で同意を得ている。同様に【表4】で「隣の犬」に対してでも、成犬ではなくて「小犬」に変わると、ハルが使われることがある。また、誰の所有でもない「捨て猫」や「捨て犬」でも、可愛い小犬や子猫という条件であれば、ハルを用いることができるという話者の内省を得ている。また、「猫」、「犬」、「猿」等に大石(1983)の分類による一般親愛語のチャン（或はサンやハン）が付けられて、ネコチャン、オサルサン等となることがあるが、このような場合などには特にハルが付きやすいと思われる¹⁶。

注12に掲げた京都～大阪間でのヤルの使用は特に誰に対してかを示さなかったが、自分の子供（但し、子供が話題として扱われる時だけ）にも使用するという内省報告も各地で得ている。筆者自身の観察でも大阪市内において特に母親が、「もうじき学校から帰ってきヤルわ」というように自分の子供（特に小学生ぐらいまでの）に対して頻繁にヤルを用いている¹⁷。

因みにハルに対者敬語（丁寧語）としての傾向が薄いとすると、美化語という可能性はないのか、という点にも触れておく必要がある。自己の品格保持（辻村1992）、たしなみの言葉（大石1983）である美化語（上品語とも呼ばれる）は、聞き手との関係で成り立つことから、対者敬語の一つとして扱ってもよく、そもそも丁寧語と分離しないという扱い方もある（井上1981）。この観点に立つと、もしハルが美化語だとするならば、聞き手が身内の場合よりも身内以外の目上を聞き手とする場合にもっと多く現れていいのではないだろうか。

一方、素材（猫とバス）によって、ハルの使用に明らかな差が生じている。ハルが美化語だとしたなら、猫には美化語を使うがバスには使わないという理由をどう説明すればいいのか。更にハルの使用に関して、あまり大きな性差が出なかったというのも、ハルを美化語として片づけてしまうわけにはいかない理由となろう。美化語は一般に男性よりも女性によく用いられるからである。ここでのハルのケースと同列には当然扱えないが、接辞「お」が付く美化語調査の結果を報告した岸江(1993)によると、この中で京都では美化語の使用に顕著な男女差が認められた。ハルと同様に大阪のヤルにも、美化語的傾向はなさそうである。大阪のヤルは柔らかい響きを持つ女性専用の形式であるが、同時に、以下でみるように男性のヨルに対応する女性専用の軽卑語的傾向もうかがわれるからである。

8. 京阪のヨルと大阪のヤル

関西中央部において素材待遇語の中の軽卑語として知られるヨルにも、京都・大阪両都市で本来のマイナス待遇としての働きのほかに、親愛語としての働きがあると考えられる。これまで京阪のヨルは、関西中央部から離れた西日本各地でアスペクトとして使用されるのとは対照的に待遇表現として機能することが確認されている。しかし、ヨルには軽卑語としての働きとは別に、親愛語としても用いられることがある。ヨルについての使用例（大阪・男性の場合）を観察してみると、

E) この赤ちゃん、よう泣きヨルなあ。

F) ほら、この赤ちゃん、また笑いヨルで。

などの E) には赤ちゃんに対して軽卑的な気持ちが込められているかもしれないが、F) の場合には赤ちゃんに対する親愛の気持ちが込められているとみる方がむしろ自然である。但し、ヨルの場合の親愛語的用法は男性で多く¹⁸、京都・大阪両方で用いられる。更にハルは聞き手や素材に対して用いられることがあるが、先ほどのヤルは聞き手には直接用いられることはない。この点で、ヨルはハルよりもむしろヤルに近いといえることができる。ヤルが女性親愛形式であるとする、ヨルは男性親愛形式と呼ぶのが適当であろう。反対に、ヤルにも親愛語的用法とは別に軽卑語的用法が観察される。女性専用の軽卑語的用法である。

G) (自分の亭主を指して) おっさん、また遊びに行きヤルわ。

H) あの男、また間違いヤツたわ。

軽卑語と親愛語との関連については、石坂(1969)・大石(1983)が既に指摘しているように、「こいつ」、「やがる」、「おまえ」という軽卑語は時として、「こいつ、うまいこと言ってやがる」、「お前はなんて可愛いんだ」等、親愛表現として用いられることがある。したがってこの点からも、軽卑語的用法と親愛語的用法の二つの機能がヨルやヤルにそれぞれ存するとみることは決して不自然ではないと思われる。

9. おわりに

以上、京都のハルには、レル・ラレルよりはやや待遇価が低い素材敬語（尊敬語）とは異なる用法が存し、これまで指摘されてきた対者敬語（丁寧語）的傾向というよりも、むしろ親愛語的傾向があるのではないかという点を指摘した。しかし、調査項目の数やデータ及び用例の数などが少ないばかりか随分偏りがあって、証明するまでには至らなかったかもしれない。

また、ハルの用法には本来の素材敬語（尊敬語）用法の他に親愛語的な用法があると述べたが、更に厳密な調査を行うことによってハルにはこれら以外に別の解釈（或は別の用法）が見い出されるかもしれない。例えば、所有者敬語の適用の程度の問題など。

ただ、もし親愛語的な傾向が京都方言のハルに存するとすれば、大阪のハルやヤルとの対応関係や、京阪方言で従来、軽卑語とみなされていたヨルの親愛語的用法等を含めて、関西中央部の待遇表現に親愛語的用法が関与し、親愛語の体系を形成しているという見方ができることになるのではないかと思われる。

そこで、京都・大阪の待遇形式ハル、ヤル、ヨルを一応【表6】のように整理することにする。

最後に、待遇表現が使い分けられる決め手となるのは、従来から目上と目下との関係といった軸、いわゆる上下関係の軸、親しいか親しくないかといった関係、いわゆる親疎関係の軸、それとここではもう一つ、親しみを持てるか否か、換言すると、親愛・非親愛の関係の軸が作用しているというのが、京阪の代表的な待遇表現ハル・ヨル・ヤルの特色であるように思われる。

尊敬語・軽卑語

	京都	大阪
尊敬語（男女共通）	ハル	ハル
軽卑語（主に男性）	ヨル	ヨル
軽卑語（主に女性）		ヤル

親愛語

	京都	大阪
親愛語	ハル（男女共通）	ヤル（主に女性）
親愛語（主に男性）	ヨル	ヨル

【表6】

注

1 岸江・中井 (1994)「京都～大阪間方言グロットグラム」の結果では、イカハルとイキハルとの対立は以下のような状況にある。これらは京都と大阪の間で対立すると見られてきたが、厳密にいうと、京都～大阪間での分布 (年齢×地理) はア段接続の形式 (イカハリマスカ類) の方がイ段接続の形式 (イキハリマスカ類) よりも広範囲に拡がっており、大阪市北部あたりでもア段接続の形式が認められる。但し、この調査では本文で述べるようなハルの用法についての調査は実施していない。

京都～大阪間方言グロットグラム

1989～1992

項目名 [ハ ル]

質問:「今日は用事で仕事に行きますか」と目上の人に言う場合、「行きますか」の部分
イカハリマスカ、イキハリマスのように言いますか。

	世 代		調査地点						
			70 歳代	60 歳代	50 歳代	40 歳代	30 歳代	20 歳代	10 歳代
01	京都市 a	北部	/	/	/	/	/	/	/
02	京都市 b	中部	/	/	/	/	/	/	/
03	京都市 c	南部	/	/	/	/0	/	/	/
04	向日市		/	/	/	/	/	/	0
05	長岡京市 a	北部	/	/	/	/	/	/	/
06	長岡京市 b	南部	/	/	/	/	/	/	/
07	八幡市		/	/	/	/	/	/	0
08	乙訓郡大山崎町		/	/	/	/	/	/	/
09	三島郡島本町		/	/	/	/	/	/	0
10	高槻市 a	北部	/	/	/	▼	0	/	/
11	高槻市 b	南部	/	▼	/	▼	▼	▼	0
12	枚方市 a	北部	▼	/	/	/	0	/	/
13	枚方市 b	南部	/	/	/	/	/	▼	/
14	茨木市 a	北部	/	/	/	0	/	/	0
15	茨木市 b	南部	/	/	/	▼	/	▼	0
16	摂津市		▼	/	▼	0	/	▼	▼
17	吹田市 a	北部	/	/	▼	/	0	▼	▼
18	吹田市 b	南部	0	0	/	/	0	0	0
19	豊中市		0	▼	0	▼	0	0	0
20	大阪市 a	北部	/	▼	/	▼	0	/	▼
21	大阪市 b	南部	▼	0	▼	▼	▼	▼	0
22	大阪市 c	東部	▼	/	▼	/	▼	0	0
23	大阪市 d	西部	▼	▼	▼	▼	0	0	0

- 凡 例
- / イカハリマスカ類
イカハレマスカ
イカハリマッカ
イカハルンデスカ
イカハレヘン
イカハラヘン
イカハル
イカール
イキャハリマスカ
 - ▼ イキハリマスカ類
イキハルンデスカ
イキハリマス
イキハリマンノ
イキハリマッカ
イキハル
 - 0 その他
イラッシャイマスカ
イカレマスカ
イカレルンデスカ
イキマスカ

2 岸江(1995)でも京都と大阪の若年層(高校生)に対して行った「ハルの使用」に関するアンケート調査結果を掲げている。普段、目上に対してハルを用いるかことがあるかどうかを聞いたもので、この調査結果では、ハルの使用率がそれぞれ京都(男性;66.7%,女性;80.5%),大阪(男性;7.0%,女性;38.0%)となった。ハルの使用頻度はここでも京都の方が大阪より高いことが明らかとなっている。

ただ、宮治(1996)の結果は父親を第三者として待遇する場面設定の調査結果であるから、目上に対してハルを普段用いることがあるかと聞いた前者の結果の方が両都市の男女とも使用率が高い。

3 岸江(1997)では大阪府全域におけるハルの分布を示した。府下南部の岸和田市以南では従来ハルが用いられることがなかった。しかし、例えば、貝塚市・泉南郡熊取町・泉南市新家などでは特に若年層を中心にハルが使用され出した。その理由は、これらの地域では過去20年間に大型の団地がいくつも作られ、大阪市方面からの人口流入(ベッタウン化)が目立つほか、大阪市内への通学・通勤が頻繁になってきていることなどによるものであると思われる。これらの地域では、特に若年層のことがかなり様変わりしてきている。

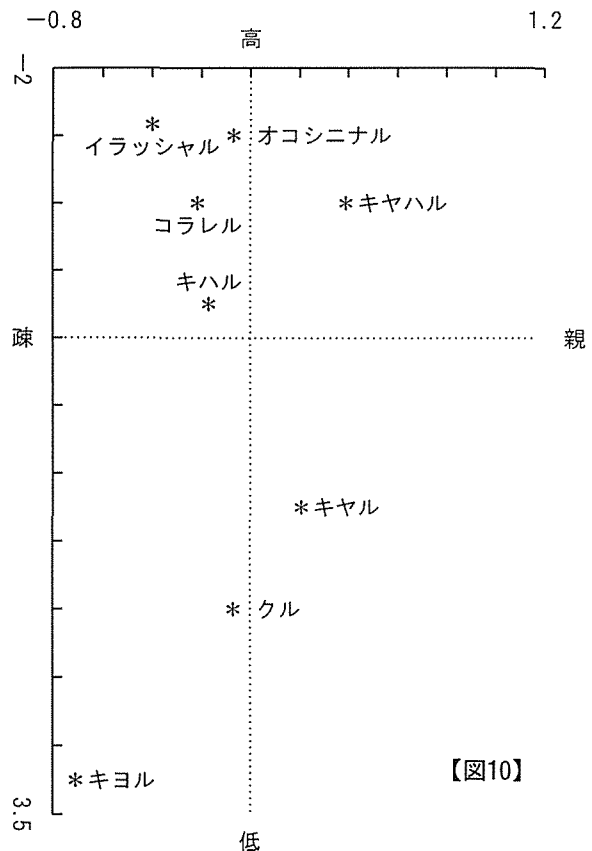
4 岸江(1995)では大阪市内の待遇表現の調査結果(話者103名)として待遇度の測定を試み、その結果を掲げた。「市会議員、校長、隣のおじいさん、父親、近所の小学生、隣の猫」といった人物(動物)がそれぞれ「もうじき来る」と母親に対していう場合、どのような待遇形式が用いられるかについて調査した。すなわち、これらの人物(動物)が第三者として話題となる場合の結果である。得られたデータに対して多変量解析の一種であるPCA分析(早野慎吾氏の協力を得た)を行い、回答された待遇形式の位置づけを行った。

ここにその結果を再掲することにした。

5 ここでの集計は性差を軸にまとめたものであり、世代差については無視している。このデータの世代差の結果は機会を見て提示したいと思う。なお、別の調査の結果となるが、京都・大阪のハルに関するデータとして真田・岸江(1990)、岸江・井上(1997)で掲げているので、参照願いたい。

6 野元(1987)によると、「絶対敬語的なものの残りは関西にはまだあります。例えば、電話に出た奥さんに、『ご主人はもうお帰りになりましたか』と聞くと、奥さんは『も

大阪市方言における待遇形式と待遇価



【図10】

うかえらりました』と答えるということはよくあります」というように述べておられる。

- 7 実は大阪でも船場に限ってかつて小動物にもハルを使うことがあったという報告が前田(1961)にある。大阪でもハルのこの用法は現在の京都と、少なくとも大阪の船場では共通していたのである。推測の域を出ないが、船場に限らず、大阪ではかつて現在の京都と同じようにハルが使われたのかもしれない。なお、ハルがどのような場面で、どのような素材に対し使われることがあるか、本稿で取り上げた素材はごく僅かであり、更に多くの素材について今後徹底的に調べなければならぬことを痛感する。
- 8 ところでここで注意しておきたいことがある。「家族の目下(弟や妹)」と「隣の奥さん」との間には実は待遇的に大きな差がなかったため、ハルの使用に差がでなかったのではないかという点である。もし「隣の奥さん」ではなくて例えば「校長先生」であったなら差が生じたかもしれないという疑いがある。しかしここでは「隣の奥さん」が聞き手である場合にハルが使用されるということよりもむしろ聞き手が「家族の目下(弟や妹)」である場合に「隣の奥さん」に対して使われるのとほぼ同程度になぜハルが使われるのかという点が問題であり、仮にハルが対象敬語的性格を帯びているとするならば、「家族の目下(弟や妹)」への使用は不自然だということになると思われる。
- 9 しかしながら、聞き手である「母親」と「近所の知り合いのおじいさん」との間に実はあまり待遇差がなかったのではないか、そのため、場面に応じてのハルの使い分けが浮き彫りにならなかったのではないかという点を疑っておく必要がある。聞き手が「知り合いのおじいさん」ではなくて、例えば「初対面の紳士」だったらハルの使用がもっと増えたのではないかという疑問である。この調査で筆者が面接した話者の多くはここでの回答を聞き手が誰であるかによるのではなくて、バスにハルが使われること自体聞いたことがなく、おかしいと口を揃えた。すなわち、聞き手をどういう人物に置き換えたとしても、バスにはハルが使われることは少ない(全くないわけではない)ということになるのであろう。
- 10 この場合の素材とは、赤ちゃんや可愛らしい子供など、それと猫などの愛らしい小動物などに限ることとする。従ってかわいい「物」、親しみを持つ「物」は含まない。ただ、現時点では厳密な調査を行っておらず、親愛を表せる「物」に対してハルを使うことができないとは明言できないことを断っておきたい。関西中央部の待遇表現に関する調査を企画し、近々実施する予定なので、親愛を表せる「物」にもハルが使えるかどうかを確認したい。
- 11 ヤルについて、和田(1961)は「女専用の、親愛とでもいうべき助動詞」とし、楳垣(1962)は「敬意とまではいかなくとも、親愛感を表す」と説明している。因みに大阪の女性は京都の女性とは異なり、ヤルとハルとを巧みに使い分けしている。例えば、自分の夫にはヤルを用いるが、夫の友人にはハルを用いる。身内でも自分の父親にはヤルを用いるが、自分の義父にはハルを用いる。
- 12 岸江・中井(1994)「京都～大阪間方言グロットグラム」の結果を以下に示す。ヤルは本来、大阪の女性に用いられる形式でこの調査では話者の性別を主に女性に限定した(一部、男性話者もいる)。この調査結果から京都～大阪間でのヤルの分布を一応確認でき、ヤルの京都・大阪間の境界がほぼ府の境界と一致していることが分かる。なお、京都府と大阪府の境界は、08京都府乙訓郡大山崎町と09大阪府三島郡島本町の間にある。また、大阪府の吹田市、豊中市及び大阪市内では、ヤルは比較的若い世代でよく用いられる傾向があることが分かる。

京都～大阪間方言グロットグラム

1989～1992

項目名【ヤル】

質問：「あの子、今日、1人で行きヤンねん」というように、「行きヤンねん」という言い方をすることがありますか。「行きヤル」とも言いますか

	調査地点		世代							凡 例		
			70歳代	60歳代	50歳代	40歳代	30歳代	20歳代	10歳代			
01	京都市 a	北部	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/ 使用しない ● 使用する
02	京都市 b	中部	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
03	京都市 c	南部	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
04	向日市		/	/	/	/	/	/	/	/	/	
05	長岡京市 a	北部	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
06	長岡京市 b	南部	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
07	八幡市		/	/	●	/	/	/	/	/	/	
08	乙訓郡大山崎町		/	/	/	/	/	/	/	/	/	
09	三島郡島本町		/	/	/	/	●	●	/	/	/	
10	高槻市 a	北部	/	/	/	●	●	●	●	●	●	
11	高槻市 b	南部	●	/	/	/	●	●	●	●	●	
12	枚方市 a	北部	/	/	/	/	/	/	/	/	●	
13	枚方市 b	南部	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
14	茨木市 a	北部	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
15	茨木市 b	南部	●	/	●	/	●	/	/	/	/	
16	摂津市		●	●	●	/	●	/	/	/	/	
17	吹田市 a	北部	●	●	●	/	/	●	●	●	●	
18	吹田市 b	南部	/	/	/	/	/	●	●	●	●	
19	豊中市		/	/	/	●	/	●	●	●	●	
20	大阪市 a	北部	●	/	/	●	●	●	●	●	●	
21	大阪市 b	南部	●	●	●	/	●	●	●	●	●	
22	大阪市 c	東部	/	/	●	●	●	●	●	●	●	
23	大阪市 d	西部	/	/	/	●	●	●	/	/	/	

13 レル・ラレルが共通語形式であるのに対し、ハルは方言形式である。親近感を持つようになったため、「親しみ」を表すハルが用いられるという見方と同時に、親近感を持ったために共通語形式よりも方言形式が選択されたという見方もハルに限っていえば可能であろう。但し、待遇表現の場合、関西では常に方言形式が共通語形式よりも親近感を表しやすいかといえ、そうとも限らない。最近使われることが少なくなっている形式ではあるが、ハルよりも待遇価が高いナハル、オ～ヤス等は方言形式でありながら、「へだて」の機能を充分備えていると思われる。

- 14 全国の諸方言の中には、ハルの場合とよく似た親愛語用法を持つ、いわゆる方言敬語が多くあるのではないと思われる。つまり、これまで方言敬語は主に目上・目下の関係、親疎関係といった観点から捉えられることが多かった。敬語と親愛語の、少なくとも二つの用法があるハルのように、親愛・非親愛といった観点でも説明できる形式が日本の諸方言に多くあるものと考えられ、この観点からの再吟味が必要であると思われる。
- 15 注7で述べた部分をここでもう少し敷衍したい。かつて船場で認められたというハルの用法が前田(1961)の記述どおりだとすると、拙稿で述べている京都のハルと同じだということになる。船場のハルはその当時大阪で特殊なものであったかも知れないが、もしそうでなかったとしたら、大阪でもかつては京都と同様にハルには尊敬語用法とは別に親愛語用法があったのではないと思われる。ところが大阪では親愛形式としてヤルが使い出されたことによって、ハルの親愛語用法が衰退し、現在のような状況に至ったのではないかと推定できる。
- 16 更に分かりやすく言うと、動物にーサン、ーチャンなどが付くというのも、親愛表現である。例えば、お猿さんとか子猫ちゃんとはいえるが、犬ちゃんとかどら猫ちゃんとは言えない。ハルの親愛語用法もこれらとほぼ軌を一にしているものと思われ、ーサン、ーチャンが付く素材には概ねハルを使用することができると思われる。
- 17 とはいうものの、拙稿で扱っている用例数、ハルやヤルが用いられる素材(猫・犬・猿など)の数、更に話者数等が甚だ少ないため、ハルには親愛語用法が存するという確たる証拠が未だ乏しいと反省せざるを得ない。今後、更にハルやヤルが用いられる対象(動物以外にも)を拡げて多項目にわたって調査し、所有者敬語、親愛語的用法、の可能性という点を詳細に見極めていきたいと思う。
- 18 京都ではハルの親愛語用法と同時にヨルにも親愛語用法があると述べた。ヨルは男性に限られるので、京都の男性では個人によって親愛を表したい時に両形式を場面に応じて使い分けているのではないと思われる。ハルの用法は元来、尊敬語用法からの転用であるから柔らかい響きがある一方、ヨルの用法は軽卑語用法からの転用であるため、やや荒い響きがあるかと思われる。「柔らかい、荒い」というのは調査に基づいたコメントではなく、あくまでも筆者の観察によるものである。なお、「個人によって」としたのは、例えば、先の【図2】～【図9】で猫などにハルを使うことはないし、使うことがおかしいとする男性ではヨルが専ら選択されているのではないかと考えられる。

参考文献

- 榎垣 実 (1948) 「京阪方言比較考」『温古志叢書』第4号, 4-32, 土俗趣味社
- 西宮 一民 (1959) 「奈良県方言の待遇表現について」『国語学』第36集, 33-46, 国語学会
- 和田 実 (1961) 「三 方言の実態と共通語化の問題点 4 大阪」『方言学講座 第三巻 西部方言』東京堂
- 榎垣 実 (1962) 「近畿方言概説」『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 前田 勇 (1961) 『大阪弁入門』朝日新聞社
- 山本 俊治 (1962) 「大阪府方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 島田 勇雄 (1966) 「近世敬語の特質」『國文學—解釈と教材の研究—』7月臨時増刊号, 45-58, 學燈社
- 石坂 正蔵 (1969) 『敬語』講談社新書
- 加藤 信 (1973) 「全国方言の敬語概観」『敬語講座 ⑥現代の敬語』明治書院

- 柴田 武 (1978) 『社会言語学の課題』三省堂
- 藤原 与一 (1978) 『昭和日本語方言の総合的研究 第1巻 方言敬語の研究』春陽堂
- 井上 史雄 (1981) 「敬語の地理学」『國文學—解釈と教材の研究—』1月臨時増刊号, 39-47, 学燈社
- 大石 初太郎 (1983) 『現代敬語研究』筑摩書房
- 野元 菊雄 (1987) 『敬語を使いこなす』講談社現代新書 講談社
- 宮治 弘明 (1987) 「近畿方言における待遇表現上の一特質」『国語学』第151集, 38-56, 国語学会
- 真田 信治 (1990) 『地域言語の社会言語学的研究』和泉書院
- 真田 信治・岸江 信介 (1990) 『大阪市方言の動向』文部省科研 (一般研究B) 研究成果報告書
- 辻村 敏樹 (1992) 『敬語論考』明治書院
- 中井 精一 (1992) 「関西共通語化の現状」『阪大日本語研究』5, 17-32, 大阪大学文学部日本学科
- 金沢 裕之 (1993) 「尊敬の助動詞『ハル』の成立をめぐって」『阪大日本語研究』6, 33-50, 大阪大学文学部日本学科
- 岸江 信介 (1993) 「関西中央部の都市敬語」『名古屋・方言研究会報』第10号, 69-90, 名古屋・方言研究会
- 岸江 信介・中井 精一 (1994) 『地域語資料1 京都～大阪方言グロットグラム』近畿方言研究会
- 岸江 信介 (1995) 「京都・大阪のことばの交渉」『比較文化研究』第1号, 55-70, 宮崎国際大学
- 宮治 弘明 (1996) 「方言敬語の動向」『方言の現在』明治書院
- 中井 幸比古 (1997) 編集代表平山輝男 『日本のことばシリーズ26 京都府のことば』明治書院
- 岸江 信介・井上 文子 (1997) 『地域語資料3 京都市方言の動態』近畿方言研究会
- 岸江 信介 (1997) 「大阪府におけるハルとヨルの分布と動態」『名古屋・方言研究会会報』第14号, 49-63, 名古屋・方言研究会

(原稿受理日: 1998年1月7日)

岸江 信介 (きしえ しんすけ)

徳島大学 770-0814 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

BZP00533@niftyserve.or.jp

The framework of expression of endearment in the Kyoto and Osaka dialect

KISHIE Shinsuke
Tokushima University

Keywords

Kyoto dialect, the survey on dialectal movement, *haru*, politeness form,
expression of endearment

There is a known difference of frequency in the use of *haru* between the Kyoto dialect and the Osaka dialect; however, the cause of this difference remains unclear. One very unique usage of *haru* observed in the Kyoto dialect is not found in the Osaka dialect. This study presents data which suggests that *haru* may not be only an honorific structure, but may have a dual function as an honorific and as an endearment form used towards very young children and animals. Previous research (Simada, Katou, Fujiwara) indicates that *haru* in the Kyoto dialect is, at least sometimes used as a politeness form. This study does not support the politeness explanation because speakers interviewed indicate that *haru* usage does not only depend on the listener but also on the topic of conversation. This study is based on the survey of more than 1000 interviewees in the Kyoto area with a sub analysis of 10 interviewees regarding the usage of *haru* as an endearment form. The Osaka dialect uses the form *yaru* specifically to express endearment and the form *haru* mainly as an honorific. The usage of *haru* as endearment in the Kyoto dialect closely parallels the usage of *yaru* in the Osaka dialect according to the results of this study. Further research hopes to elaborate on the apparent tendencies noted in this study.